



上越教育大学
教授 木村 吉彦

接続期カリキュラムの実現に向けて

木村の専門は、幼保小連携を中核とした生活科教育学である。生活科では、平成20年の『小学校学習指導要領解説 生活編』において、「スタートカリキュラム」の解説を行い、その実現を目指している。一方、幼児教育（幼稚園・保育所・認定こども園）においては、横浜市教育委員会が「アプローチカリキュラム」という名称を全国発信し、年長児の最後の半年におけるカリキュラム編成を提案してくれた。この二つのカリキュラムを合わせて、文部科学省は「接続期カリキュラム」という名称を全国発信している。

これまでも、幼児教育と小学校教育の連携の重要性は全国的にも知られていたが、より具体性のあるカリキュラム編成・実現をめざす時代に入っている。接続期カリキュラムの実現は、文字通り「先端課題実践開発」の課題そのものである。本稿では、本講座における教育実践学の歩みと今後の展望を象徴する「接続期カリキュラム」について、実際の姿と今後のあり方について全国発信させていただく。

1. 幼児期の学びと小学校1年生の学びをつなぐ接続期カリキュラム

(1) アプローチカリキュラムとは

幼児教育の最終段階である5歳児教育の後半（10月～）における、小学校進学後を意識したカリキュラムが「アプローチカリキュラム」である。スタートカリキュラムの前提となる内容なので、その意味づけや具体的なあり方を示す。

小学校進学後を意識したカリキュラムとしては、保育所の場合、午睡（お昼寝）をなくすことがまず考えられる。一方、幼稚園も含めた「アプローチカリキュラム」では、集団による遊びを取り入れる、話し合いや友達の前で自分の考えを語るような集団活動も取り入れる、昼食時間を小学校の時間に近づける、椅子に座って先生やお友達の話を聞く場面を設ける、等が考えられる。そのほか、小学校との交流授業や行事への参加、1日入学など、やがて自分の生活場所となる環境に慣れ親しむような機会を提供することが重要である。幼児教育の本質に基づき、小学校教科学習の事前指導ではなく、「生活リズムの変化」を提供することで、幼児が新入児童になった段階での小学校生活への「適応」を促すことを目的とするのがアプローチカリキュラムである。

(2) スタートカリキュラムとは

幼児期の遊び中心の生活経験を踏まえた、合科的・関連的な学習の導入が小学校低学年教育に必要であり、その中核を担うのが生活科である。生活科のもつ幼小連携の重要性はこれからもますます強調されていくであろう。ここでは、この「スタートカリキュラム」について、その定義や意味付け、そして作成のポイントについて述べたい。

「スタートカリキュラム」とは、新入児童の入学直後約1ヶ月間において、児童が幼児期に体験してきた遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせた、合科的・関連的な学習プログラムのことである。とりわけ、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、児童に「明日も学校にきたい」という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらす、新入児童の小学校へのスムーズな「適応」を促してくれることが期待される。

① スタートカリキュラムにおける合科的な指導とは

学習のねらいとして、抽象度の高い「方向目標」（育てたい子ども像と、どの方向に子どもを育てたいのかを明示した教育目標）を定め、その目標を達成するために、遊び的要素の強い活動や教科にも連動するような活動を取り入れ、児童の登校意欲や学習意欲を高めるような指導のことである。

例えば、「がっこうだいすき」という単元名にし、目標を「学校が大好きになり、明日も学校にきたいと思える子ども」を育てることと設定する。実際の活動には、学校探検（生活科）・自己紹介（国語）・友だち何人？（算数）・校歌を歌おう（音楽）・自画像で自己紹介（図工）などを取り入れ、やがて様々な教科学習に結びつく活動を遊びながら展開していくことが考えられる。スタートカリキュラムは、「育てたい子ども像＝活動を中心とした学習全体のねらい」が先にある合科的指導が相応しいと考える。

② 小学校生活への「適応」を促す

子どもにとっては、遊び中心の生活から教科学習中心の生活へと生活スタイルが変化することは、かなり大きな「段差」である。これまでは、自分で決めた課題（自分のしたい遊び＝内なる課題）を自分で達成する（自分の力で実現する）生活が中心だったが、教科学習は外から来る課題に自分がどのように対処するのか（知識・技能の習得）が問われるからである。それと同時に、自力での登・下校、時間割に基づく生活、施設・設備の違い等々、子ども目線からすれば多くの「段差」が見られる。そのとき、これまで経験してきた「遊び」の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子どもにとって「小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ」という自信（自己肯定感）が持てるきっかけになる。これが、スムーズな「適応」を生み出すというスタートカリキュラムの第一の意義である。

2. 今後のあり方ー「交流⇒連携⇒接続」の流れー

これまで、全国的に多くの小学校区において「幼児教育との交流」が行われている。この場合の「交流」とは、園・学校行事への参加や生活科授業への招待・参加（多くは「あそびランド」等）などである。しかし、「交流」の場合、その時・その都度に合わせて、可能であれば参加する・参加してもらうというケースが多いようである。つまり、「交流」の多くは「計画的な事前の配慮に基づいていない行事・授業参加」である。

もちろん、思いつき中心の「交流」に意味がないということではない。複数回の「交流」体験に基づき、幼稚園・保育所・子ども園及び小学校（低学年だけとは限らない）における年度計画の中に、行事や授業への園児・児童参加を年度初めの4月段階からあらかじめ取り入れることで、事前の打ち合わせや事前準備を明確化して、幼児・児童の成長まで目標に取り入れ、年度計画に基づき「相互理解と互惠性のある教育活動」に高めることが幼児教育と小学校教育との「連携」である、と木村は理解している。

そして、現在は「幼児・児童の相互交流に基づく幼保小連携」のみにとどまらず、新入児童の小学校生活への「適応」を促すために、幼児期末から小学校入学期にカリキュラムを作成して「接続」を重

視する時代である。幼児期から児童期への発達の継続を大切にし、その「連続性に基づくカリキュラム作成」、つまり登校意欲（「明日も学校に来たい」）を高め、学習意欲（「もっと勉強したい」）の高まりにまでつなげるカリキュラムづくりによって、新入児童の「適応」を促すのが「接続期カリキュラム」である。

このように、その都度の判断に基づく「交流」から始まり、計画的な目標設定に基づく「連携」、そして、新入児童の小学校生活適応を実現するためのカリキュラムづくりによる「接続」へと、幼保小連携の課題が進んできているのが時代の流れである。

木村吉彦/監修・長野県茅野市教育委員会/編『育ちと学びをつなぐ「幼保小連携教育」の挑戦 実践 接続期カリキュラム』（ぎょうせい、2016）